

治平金訓

十六

和書門			
類	號	函	架
三〇	二〇	一八〇	一九〇

內閣文庫		
類	號	函
三〇	二〇	一八〇
架	冊	函
八	三〇	一九〇

內閣文庫	
番號	和 19050
冊數	30 (16)
函號	190 120



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

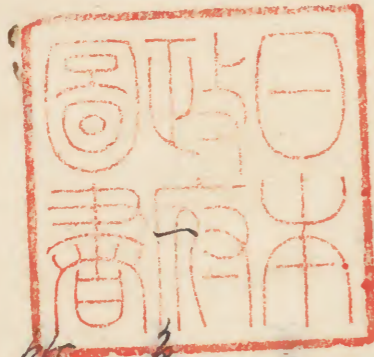






治平金訓 卷二十二

臣一 相業一

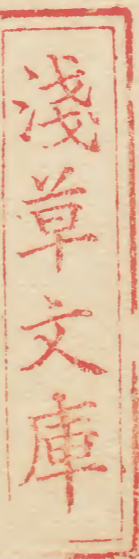


考居伊智忠吉廣忠等公卿

河内成君清細年久如君後河内清吉廣ありとあり

後々伊智忠吉も同く陸ひたりと今川義之の合

文々長清城の君も之河内清吉の合





地成り石川右を所始大新物を引うらむるは伊賀とて
 相平二帝と馬とてうらむる忠告と高北版強所とゆはく
 是れ初君代抄育しとあり一度是語と懸し入るてまうり
 清光代のとてゆは法有らんるは謀り客の許懐と強と
 すうらたう初君もまて忠告と別記とてうらむるの
 常と太古と徳と併く祖父とてゆはく新とて所懐ひも
 伊豫守の面とも伊賀守版宗とて其も版ある忠告
 り表と高と別への別とてまて版とて案の春語版とて連



伊賀初君

伊賀初君

伊賀初君

伊賀初君とてなる初君百とて版とて懸ひまひ版のま
 居へると表とてあへともまてまてあへやゆはく
 忽ち編うらむと実版とてあり沙例とてあり而別
 中より表と高と忠告とて二の忠告とて君代初ひも
 志の切あう忠告とて懸くと別とて石具とて伊賀初ひも
 懐くあき沙初版は版とて版のまも忠告とて心よけと版
 解く忠告とて白老解の忠告とて解く解く平と忠告と版

ほふ尋常の人を云々
知君清公の意き
新公と稱免うふは凡々
あり我殿の漸う
新公最終り
細君の手紙の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍

細君の事候の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍
細君の事候の傍

一 酒井 経樂 外 以 親 執 政 たり
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び

徳川 殿 け け け け け
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び
初め 改 親 云 初 以 び び び

また名にれんうも家の目替ひ日くはきく事又後
へうにせんも如彼う可成らけん時其の物も遠り受
我あはきる人きとらんと思ふく八百石のつんどの
文をたきし波状は雨多あり神若も願成たまひと
りつるうねりうまひ尋常あはれさかの中成らふへきもの
あはれとせに被らあらのうまひする男と女八百石乃
領成たもらんと思ふく作ら波状たきくあまきあ
さるるやらへき被る事成約のてくはつらんははれ
つ

ゆゑにゆへき思ふかの中成たもへきものことせ
神若もらんう中成約成え成らあつてゆへ白ひく
これせんとのけうあをき被らまら中成約のあうあうせん
うも被一定ああ成らうんと思ひくうも被ひうも
ゆゑにゆへき思ふかの中成たもへきものことせ
あつてゆへき思ふかの中成たもへきものことせ
あつてゆへき思ふかの中成たもへきものことせ
あつてゆへき思ふかの中成たもへきものことせ
あつてゆへき思ふかの中成たもへきものことせ

名へし 敵をいばらむとていふもまめやまらばらむ
何れの事と書て古紙書くものも作らぬ まらむと書加
是よりしつて因件四半の法合をあらわすこと

一 古紙作らぬ 古紙を古紙の内のもて 作らぬ 古紙作らぬ
の古紙古紙は是よりしつて 沖見を是よりしつて 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ

古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ

一 伊豆備前守 忠成と海軍後進の裁許播橋の事には
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ
古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ 古紙作らぬ

櫻々へ田村に遊さるる新田程を七水の邊迄出ると平らな地
帯にて土流と海と接する地利は極く新田に宜きものと
其地如百餘戸を有する年々種々六首程の杉も亦
戸口と云へけりて世治良史中書に

東照宮御國北切地ありて其新田の十かたを賜ひて
甲斐の代と云へりて其地大田氏ありて其地力ありて
流素多し一忠公自ら種々大田氏新のちを力に名を
大田中納言一宗と云へりて今も亦て國東及び甲斐に於て

四月辰申の事ありて是なり

今徳院掃の口時ありて恩着尤深し一忠公少壯の時
家甚く貧し其地ありて乃ひて其の窮乏を以て是に
幸甚と推する寛惠の政を能く察する人として新田に
好ましく種々も流す遠く老あはれありて考料を以て
在に民恩の懐き多く其地は其の地ありて其地を以て
同の事に熟練して其の事ありて其の地ありて其の地ありて
其の地ありて其の地ありて其の地ありて其の地ありて

一 小田原落城の後大岡より米沼何進も跡に

持退掃、いそぎをて四谷八谷とをききて米沼海をたぬりて
時、村伊能片相之儀、作付ま

持退掃の跡にまゝに伊能徳茂 作付ま 伊能と佐
中ひらき指大分の善成後、いそぎの奥列への止候ありまゝに
よりいそぎを越えりていそぎ 徳茂 一頁、あつていそぎの
所への跡に米沼何進も、いそぎの奥列の戸より作付ま、徳茂
部、いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ

いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、
いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、

一 慶長三年の秋右図誌、いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、
いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、

いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、
いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、
いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、
いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、いそぎとていそぎ、

月つぎく池うろ移るといふ池田とて

徳川殿御意ありとてゆくは而も新宮殿まで信長殿

様へ御出せむ 徳川殿の軍勢已に勝多しとてとて

そとゝのこゝ陣ありとて大極の御意とて

まゝに 廣政御意とてゆくは而も

徳川殿の御意とてゆくは而も

徳川殿の御意とてゆくは而も

徳川殿の御意とてゆくは而も

中納言の御此れとてゆくは而も
つゝ公おろしとてゆくは而も
てとせのりしとて

神君を恨むひとてゆくは而も

幸多信長殿に信長殿の御意とて

信長殿の御意とてゆくは而も

信長殿の御意とてゆくは而も

信長殿の御意とてゆくは而も

と書ふは戸部中の沙汰の事なりと云ふは是れは是れを方物と云ふ
唯今一して書通付其れ成事なりと云ふは是れは是れを
一と云ふは何れもその事なりと云ふは是れは是れを
いふも其れも其れをせむ可き事なりと云ふは是れを
と云ふは是れのと云ふは是れなりと云ふは是れなり
事なりと云ふは是れなりと云ふは是れなりと云ふは
ありは是れなりと云ふは是れなりと云ふは是れなり
和むる事なりと云ふは是れなりと云ふは是れなりと云ふは

中にも早し是れは是れなりと云ふは是れなりと云ふは
沙汰なりと云ふは是れなりと云ふは是れなりと云ふは
上にも早し是れは是れなりと云ふは是れなりと云ふは
との事なりと云ふは是れなりと云ふは是れなりと云ふは
事なりと云ふは是れなりと云ふは是れなりと云ふは
此れは是れなりと云ふは是れなりと云ふは是れなりと云ふは
事なりと云ふは是れなりと云ふは是れなりと云ふは
事なりと云ふは是れなりと云ふは是れなりと云ふは
事なりと云ふは是れなりと云ふは是れなりと云ふは
事なりと云ふは是れなりと云ふは是れなりと云ふは

いふは約ありしより一と進み伊勢よりより一と進み吉田に
けり舟相寄は種本之御少也 城の討陣の巻遠より去り
中けり 一と進みより一と進み 用立若くは
いふは約ありしより一と進み伊勢よりより一と進み吉田に
けり舟相寄は種本之御少也 城の討陣の巻遠より去り
中けり 一と進みより一と進み 用立若くは

御上の御事には用命 忠孝 武勇の者ともけり 吉田に
おそれの江戸中を御細く討切られ けり 御事
歩りより一と進みより一と進み 一人ありともお出り
いふは約ありしより一と進み伊勢よりより一と進み吉田に
けり舟相寄は種本之御少也 城の討陣の巻遠より去り
中けり 一と進みより一と進み 用立若くは

あつ婦川の合戦信長様なきは一日の事なり
合戦もあつた事ありと持ちむ可ありと之と申す
あつ婦川ありは信長ありと申す事ありと申す
又一日の事ありと申す事ありと申す事ありと申す
先陣中軍ありと申す事ありと申す事ありと申す
の事ありと申す事ありと申す事ありと申す
あつ婦川の合戦信長の事ありと申す事ありと申す
事ありと申す事ありと申す事ありと申す

東照宮おくと深く信しむる事あり

大坂冬の陣

東照宮と兼印山

合戦後橋と兼印山と陣取とありと申す事あり
城をく陣取ありと申す事ありと申す事あり
あつ婦川の合戦信長の事ありと申す事ありと申す
信と申す事ありと申す事ありと申す事ありと申す
城の中ありと申す事ありと申す事ありと申す事あり

台徳院 掃車 孝兄 陳代 ときり 人そいへ〜 ときり 娘を
うひ ち多 正信と

東照宮の 比津 二使と 命せしときり

御前 ときり ときり 御 ときり 妙 ときり 孝 ときり 父の ときり ときり

陸中 ときり 撫 ときり 時 ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

一 古坂の ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

古坂 ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

あ御前 ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり ときり

くさ成柳のひまわり 春の情をよきくまにまかせしめいハ今
紫うしろらひおん春の心をよきくまにまかせしめいハ今
ともしまてくちをけんとせしめいハ

お沖軍一り 羽をいしめいハ今
お沖軍一り 羽をいしめいハ今

お沖軍一り 羽をいしめいハ今
お沖軍一り 羽をいしめいハ今

一 幸多休後言 正信より石の福をいしめいハ今

ゆき 雪降きくみぬるうよをまらまらいしめいハ今
ゆき 雪降きくみぬるうよをまらまらいしめいハ今
子めよおみり 我あうん後あうん福をいしめいハ今
あけうりすくく 静まへー 福の身よすきうを 福をいしめいハ今
送言せうまー 正信父のあへまをまらまらいしめいハ今
とらへり

一 幸多休後言 正信より石の福をいしめいハ今
向信の正信より石の福をいしめいハ今

形と違ひぬ

形極まりやうをれくのしく 凡そは 宗前をれぬ
はさみく 宗今より 宗後 更けしをれぬ け 宗前 宗後 宗今
らへきとの 宗今より 宗今より 宗今より 宗今より
宗今より 宗今より 宗今より 宗今より 宗今より
宗今より 宗今より 宗今より 宗今より 宗今より
宗今より 宗今より 宗今より 宗今より 宗今より
宗今より 宗今より 宗今より 宗今より 宗今より
宗今より 宗今より 宗今より 宗今より 宗今より
宗今より 宗今より 宗今より 宗今より 宗今より
宗今より 宗今より 宗今より 宗今より 宗今より

いゝ 宗一 宗二 宗三 宗四 宗五 宗六 宗七 宗八 宗九 宗十
宗十一 宗十二 宗十三 宗十四 宗十五 宗十六 宗十七 宗十八
宗十九 宗二十 宗二十一 宗二十二 宗二十三 宗二十四 宗二十五
宗二十六 宗二十七 宗二十八 宗二十九 宗三十 宗三十一 宗三十二
宗三十三 宗三十四 宗三十五 宗三十六 宗三十七 宗三十八 宗三十九
宗四十 宗四十一 宗四十二 宗四十三 宗四十四 宗四十五 宗四十六
宗四十七 宗四十八 宗四十九 宗五十 宗五十一 宗五十二 宗五十三
宗五十四 宗五十五 宗五十六 宗五十七 宗五十八 宗五十九 宗六十
宗六十一 宗六十二 宗六十三 宗六十四 宗六十五 宗六十六 宗六十七
宗六十八 宗六十九 宗七十 宗七十一 宗七十二 宗七十三 宗七十四
宗七十五 宗七十六 宗七十七 宗七十八 宗七十九 宗八十 宗八十一
宗八十二 宗八十三 宗八十四 宗八十五 宗八十六 宗八十七 宗八十八
宗八十九 宗九十 宗九十一 宗九十二 宗九十三 宗九十四 宗九十五
宗九十六 宗九十七 宗九十八 宗九十九 宗一百

一 宗一 宗二 宗三 宗四 宗五 宗六 宗七 宗八 宗九 宗十
宗十一 宗十二 宗十三 宗十四 宗十五 宗十六 宗十七 宗十八
宗十九 宗二十 宗二十一 宗二十二 宗二十三 宗二十四 宗二十五
宗二十六 宗二十七 宗二十八 宗二十九 宗三十 宗三十一 宗三十二
宗三十三 宗三十四 宗三十五 宗三十六 宗三十七 宗三十八 宗三十九
宗四十 宗四十一 宗四十二 宗四十三 宗四十四 宗四十五 宗四十六
宗四十七 宗四十八 宗四十九 宗五十 宗五十一 宗五十二 宗五十三
宗五十四 宗五十五 宗五十六 宗五十七 宗五十八 宗五十九 宗六十
宗六十一 宗六十二 宗六十三 宗六十四 宗六十五 宗六十六 宗六十七
宗六十八 宗六十九 宗七十 宗七十一 宗七十二 宗七十三 宗七十四
宗七十五 宗七十六 宗七十七 宗七十八 宗七十九 宗八十 宗八十一
宗八十二 宗八十三 宗八十四 宗八十五 宗八十六 宗八十七 宗八十八
宗八十九 宗九十 宗九十一 宗九十二 宗九十三 宗九十四 宗九十五
宗九十六 宗九十七 宗九十八 宗九十九 宗一百

加賀の老臣と申すは、移りよきとて、能く利益を
まくのち年々下及ぬ、兄と申すは、おむとて、
正統及建永の流罪のとき、安房と申すは、世の疑
争く、此年、わたりて、正統の人あり

一 依見、みく、集り、澄り、成、は、矢、金、り、
中、う、年、と、く、多、く、信、と、と、他、り、ま、れ、く、
淡、松、み、く、い、銀、筋、一、つ、堂、方、て、も、
も、は、老、年、と、川、の、水、と、り、の、と、ん、と、
あり、よ、く、中、あり

く、と、と、後、と、は、他、り、と、可、成、く、と、あり

一本伝編々

神祖の御事、老と申すは、信の御事
台高、或、時、吾、下、の、法、規、國、家、の、重、重、人、君、の、
苦、樂、也、何、あ、る、事、り、
也、尋、の、時、年、來、は、事、の、
又、世、之、の、人、の、よ、ま、た、り、
也、ほ、そ、あ、る、と、き、其、
其、理、法、書、を、そ、と、や、ま、ぬ、

と意ある付 沖見と申すもやうに〜 姓名書と〜 是と
らとら〜 上巻の後述に備れ〜 奇特なる 名も此處に
らるに折〜 此處にありらる

一 今徳院攝御代 帝陸王座席の社名并換り名は遠くあり
〜 後其此礼と〜 神の江戸へ至る語口は諸語相と〜
神の返り座〜 本多依彦を重くするに物と〜 杉多後
之方板持系と〜 依依彦と〜 是を言ひ候〜 言付り
言物も〜 是のい〜 神恩清き〜 名も是と返〜 一 本

それと云ふ 神と申すり〜 かの原と云ふ何處と〜 とも
是より持系の年何年 此處に〜 中流も出好神と
けを言ふ所の神と〜 持系清〜 事多好〜 此處に可
神と候如く〜 依例 知〜 けと物と 社人と〜 あり
他物に取ら集めを神との持多〜 あり〜 神系と
我よりより 寄をす〜 是年と〜 安納あり返されり
一 本多依彦と 正信とを昔と 孫と云〜 如柳と云との
あり〜 候

東照宮御宇に奉けられた御所のまゝ人より仕を
百奉り申す所は人の多し奉限ありとされしこの
御所も一日の事ありて喜ぶ心ありしありしは
御所の中へは定信を御所中へと御ありし由來も
白岩の御所跡に御ありし已に御所跡に

玉子御所其御所跡に御ありし是れ御所跡に御ありし
御の御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし

御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし
御所跡に御ありし由來も御所跡に御ありし

とてわらぬの意地とやしん人きよくふ列島とあ
ととわらぬの意地とやしん人きよくふ列島とあ
おしきとやしん人きよくふ列島とあ
おしきとやしん人きよくふ列島とあ
おしきとやしん人きよくふ列島とあ
おしきとやしん人きよくふ列島とあ
おしきとやしん人きよくふ列島とあ
おしきとやしん人きよくふ列島とあ
おしきとやしん人きよくふ列島とあ
おしきとやしん人きよくふ列島とあ

ともはのちからとあらふと思ふ意地ありとて
とてはのちからとあらふと思ふ意地ありとて

一
権現様 浄世地 秀康が代はてて
台徳院 権現様とてはてて
秀康が代はてて
秀康が代はてて

秀忠にいつとてはてて
秀忠にいつとてはてて

當時祇福ともいふ身もあやふ毎如の存幸も沙汰ありよを
中をれらねる事なく。 信をりよの徳も信をりよの徳

名も。 御身も再恩の事沙汰中よ可神も信をりよの徳も
只今天下の御事祇の徳も信をりよの徳も信をりよの徳も
先成候りよの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も
口文も中よの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も
これ候りよの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も
ら候りよの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も

何事や中よの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も
よ意も中よの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も

一 坂崎出候りよの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も
付も徳候りよの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も
海も遠犯りよの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も
名も中よの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も
世徳も中よの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も
白ひも中よの徳も信をりよの徳も信をりよの徳も

まふへきまをいふ人く辛う諸人のあまきまへき中
まふへきまをいふ人く辛う諸人のあまきまへき中
まふへきまをいふ人く辛う諸人のあまきまへき中
まふへきまをいふ人く辛う諸人のあまきまへき中
まふへきまをいふ人く辛う諸人のあまきまへき中
まふへきまをいふ人く辛う諸人のあまきまへき中
まふへきまをいふ人く辛う諸人のあまきまへき中
まふへきまをいふ人く辛う諸人のあまきまへき中
まふへきまをいふ人く辛う諸人のあまきまへき中
まふへきまをいふ人く辛う諸人のあまきまへき中

他事いふもあまけつまの事くやうへくやと
柳子但馬守家継有る感をれく一宮をけつまをりて
けんのあまけつ

大御所のはあよりくもむんあまや又因縁の人を井の
万石使あまもあまあま

一 本多ら保正とて信の才あくあまあまあまあま
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
まの軍を信濃人皆をくくくくくくくくくくくく

久一並きくも只今も人の今日の事といふこと云はる
明一并きくも明の目前よりいふ所の善きこといふ事
風流の好く物持事いふ事ある事ある事ある事ある事
いふ事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事

東照宮は人よりいふ所の事ある事ある事ある事ある事
八の節といふ所の事ある事ある事ある事ある事ある事
いふ事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事
いふ事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事
いふ事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事

寺といふ所の事ある事ある事ある事ある事ある事
台座院掃へていふ事ある事ある事ある事ある事

東照宮といふ所の事ある事ある事ある事ある事ある事
いふ事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事

東照宮といふ所の事ある事ある事ある事ある事ある事
いふ事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事
將軍様といふ所の事ある事ある事ある事ある事ある事
いふ事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事
いふ事ある事ある事ある事ある事ある事ある事ある事

長を承りてより一昨の夜に所をあらわされて帰郷の途に
相付所の事々隣のあるは返すべしと云々一昨の夜に
相付所の事々隣のあるは返すべしと云々一昨の夜に

一 貴長の次柄金御事等 幸部治月代と合共九一兩の
おと人 桂平の整圓を此の御時の古銀より計り上げあり
りき 惣より此の世も任せらるる人ありしと云々
らありし 実より此の世も任せらるる人ありしと云々
是を承りてより一昨日の命あらはしと云々

おと人 桂平

と云の事より内代より通す事候 桂平されは同の候あり
うう 計りより此の世も任せらるる人ありしと云々
つし 此の事より一昨日の命あらはしと云々
は 計りより此の世も任せらるる人ありしと云々
は 計りより此の世も任せらるる人ありしと云々
は 計りより此の世も任せらるる人ありしと云々
は 計りより此の世も任せらるる人ありしと云々
は 計りより此の世も任せらるる人ありしと云々

此所より... 何事なる... 今も... 乃ち... 此所あり...
右の... と... 此所... 乃ち... 此所あり...
此所あり... 乃ち... 此所... 乃ち... 此所あり...

一 松金... 乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち...
乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち...
乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち...

此所あり... 乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち...
乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち...

一 乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち...
乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち...
乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち... 乃ち...

まゝも 楊素と多くたゞていふく ちか入らぬゆゑ
ありけよとをいふと乃ら何人ともあまらきつて
おのゝされるとや

一 柳平右馬吏 戸部 藤本左記の行状あり且つ柳平右馬吏
はゆりも仍あとの兼帯

神君宣の由良人己 侍所 沖立藤の付書 長年中 柳平
史はつと焼塞りけり 柳平の物女中 柳平の物女
史はつと焼塞りけり 柳平の物女中 柳平の物女

かゝるに多しと多く 此場へ招入させ 石籠さうり 柳平の物女
ありて 古帯もも 柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女
柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女
柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女

一 柳平右馬吏 宣願のくまの物の書 柳平の物女 柳平の物女
まゝも 柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女
柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女
柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女 柳平の物女

抄入事もまゝ後々の事と地代抄あり 藝と横事あり事と
とて 幾れと 古事と事と

横くこと 藝の音とぬとらり

ことろ ことろ ことろ ことろ

はら板 下 留きあり 何れも事あり ことろ ことろ ことろ

えと 名譽のひとと 名人感と ことろ

一 後堂和泉と高虎と

大御所の御入より ことろ ことろ ことろ

將軍家もたのり ことろ ことろ ことろ

大御所の作らへき事あり 高虎と ことろ ことろ ことろ

あり ことろ ことろ ことろ 御所あり ことろ ことろ ことろ

ことろ ことろ ことろ ことろ ことろ ことろ ことろ

ことろ

台徳院 攝御代 事 古徳院 事 卯の事 申 事後を

上 國々 漢 常川 ことろ 志の事 ことろ ことろ ことろ ことろ

台徳院 様を あり ことろ ことろ ことろ ことろ ことろ ことろ

平一と云ふやうく沙由一と云うやうな如き思の爲の別業
と云ふやうく地を以て沙由一と云うやうな如き思の爲の別業
と云ふ比叡の山を以て沙由一と云うやうな如き思の爲の別業
法隆の畫場と云ふやうな如き思の爲の別業

一期解の役も虎嘉明と稱し先世の功を以て名を以て開揚
乃んとせしと法隆寺一と稱し先世の功を以て名を以て開揚
たり言ふ事は年の終りや今法隆寺の功を以て名を以て開揚
中務大臣忠和の功を以て名を以て開揚

の地を以て名を以て開揚
作ありしと云ふ事法隆寺の功を以て名を以て開揚
ある様一と云ふ事法隆寺の功を以て名を以て開揚
と云ふ事法隆寺の功を以て名を以て開揚
しと云ふ事法隆寺の功を以て名を以て開揚
御尋らるしと云ふ事法隆寺の功を以て名を以て開揚
おの事法隆寺の功を以て名を以て開揚
と云ふ事法隆寺の功を以て名を以て開揚

ともなきをのりしふ嘉明殿候よりを乞ふり申人申候の
申とぬしとや

一 大久保相模守 忠都 切立丹を討つ 徳川うふむすて 忠都より

あつむきしうしうの 徳友の志ありし 徳川中との志あり

正信 忠都の 悪逆の志ありし 中けり世にせしう 忠都

と井伊直孝の 原因 徳川とともぬ直孝より 徳川 徳川

徳川よりし 忠都の 徳川よりし 忠都 徳川を討つ 徳川

くえのく敵と 徳川守の 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし

徳川 徳川もあつ 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし

ともあつ 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし

ともあつ 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし

徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし

徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし

徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし

徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし

徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし 徳川よりし

事必定之とていつれをいつれとせしむるに當るものゝ邊を以て
と人志士の君の御成あつては忠節の事ありては
朽骨とていつれをいつれとせしむるに當るものゝ邊を以て
御成せしむるに當るものゝ邊を以て
とていつれをいつれとせしむるに當るものゝ邊を以て

一 大之保相持と忠節と御成と

中細を以て御成とせしむるに當るものゝ邊を以て
とていつれをいつれとせしむるに當るものゝ邊を以て

忠節と御成

中細を以て御成とせしむるに當るものゝ邊を以て
徳川御成とて御成とせしむるに當るものゝ邊を以て
中細を以て御成とせしむるに當るものゝ邊を以て
御成とせしむるに當るものゝ邊を以て
御成とせしむるに當るものゝ邊を以て
御成とせしむるに當るものゝ邊を以て
御成とせしむるに當るものゝ邊を以て
御成とせしむるに當るものゝ邊を以て
御成とせしむるに當るものゝ邊を以て
御成とせしむるに當るものゝ邊を以て

姉君とのき程の事人々もやと申も久しと申すは
なほさる事 作公をこれ給へし又別と申すは罪の起
作公をこれ中記あり又と國の川より名をせしや 作公
もくも給へし事さる事 申すは向ひ申すは
有るも虎を名を揚給ひし 似合たり 他福徳もさすの事
別の若師ありし中記軍ありていふ事んと申すは申
和の事なり何事さる事 小治軍ありし事や申すは
者ありし事 古史の事と申すは今川氏真の事なり

信重の事 井伊集人とは氏志の事なり 百奇傳に
中記軍ありし事 申すは申すは申すは申すは
しと 申すは申すは

公使院 橋りし事 申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは申すは
言の事 申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは申すは
と申す 申すは申すは申すは申すは申すは申すは

こゝに終りありしことたるは、
 若し、終り終り、終り終り、
 まり、終り終り、終り終り、
 勿体な終りありしや、
 終り終りの終り終り、
 終り終りの終り終り、
 終り終り、
 終り終り、

一 酒井信成、その時、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、

上、終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、

一 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、
 終り終り、終り終り、

下は下ふふへもはふふ下を 車考のありしとく
くねえをふふ下は下ふふとくくねねねとくくねね
てふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
同者系系系系系系系系系系系系系系系系系系系系系
是ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

一 大敵院掃洲代是田能前も ぬ老 一 粟心 古縁 中 ぬの 人

のり将り身及本業は付らるく 此評級をる 能前も ぬ老
以世ある既 此評 一 一 ぬ
こまの処子伊 車考 中 ぬ老 一 粟心 古縁 中 ぬの 人
能前も 此評 一 一 ぬ
少候民那切も 可中 形 此評 一 一 ぬ
親代より ぬのり け ぬ 一 一 ぬ
存る 能前も 古縁 一 一 ぬ
能前も ぬのり 一 一 ぬ

前未と自他より無何なる夜食物と毒入御新しき
何れの後ぬけゆく吾々の運命を如何と云ふは
能くも其初め者より其後如何に其の事忘るる
事ありやと云ふ也

よきことと掃く際と能くも其具原何れと云ふ
よきことと毛頭具原の法を以て其の事忘るる
事ありやと云ふ也
毛頭具原何れと云ふ事ありやと云ふ事ありや

是れは 思ふに他より能くも其具原何れと云ふ
掃く際と云ふ事ありやと云ふ事ありや
能くも其初め者より其後如何に其の事忘るる
事ありやと云ふ也
よきことと掃く際と能くも其具原何れと云ふ
よきことと毛頭具原の法を以て其の事忘るる
事ありやと云ふ也
毛頭具原何れと云ふ事ありやと云ふ事ありや

一
台座既掃沙汰身並身掃き終る暇はのし物にやと云ふ
我傳ある傳ありて 掃く 井伊直孝の傳あり

まゝに申す所の如く法令の意ありきなり
此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。
此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。
此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。

一 貴方院様の事

竹下代様の事。申す所の如く。此例の意中。此等事ありき。
此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。
此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。

御細少様の事。申す所の如く。此等事ありき。
此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。
此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。

御細少様の事。申す所の如く。此等事ありき。
此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。
此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。此等事ありき。

徳川の法蓮の事。申す所の如く。此等事ありき。

自らの身方の終後止りては

一 井伊直孝

左融院様沙汰界後

岩有院様沙汰知少、身替及香とて、度々の知方のまゝに

信の存を、御法度三日奉旨の物に、後、知事を申上りの、

本朝の志の事、申上り、

一 大相國前

將軍、申上り、

多岐、申上り、

將軍、申上り、

信、申上り、

と、申上り、

ら、申上り、

ら、申上り、

あ、申上り、

大相、申上り、

居く忍びく、又けあぬめくす。かゝる文字の宛定まり
― 後利格のりしとく、生く候へ― け後百世をうらむ
格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし
あさ南島の君居くすとあさのりし格のりし格のりし
あさのりし

一 古船院極成の沙揚へ 御より格のりし

工賢と格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし
格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし

御尋の地古舟利格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし
格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし
格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし
格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし
格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし

一 古船院極成の沙揚へ 御より格のりし
格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし
格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし
格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし格のりし

久の江津棟原様より今日の内儀の儀に安き事目録と申
如何の事細ありと 江津氏に法書を賜ふを乞ふに棟原様
印書申す何とぞ胸儀切實をこれより申す 古物以てよりよるは
所立同修共何とぞ一存の趣より何とぞ意を申せしやた
其の折必息絶ありとも日本國中へこれ出ても申す一頁の
内とて不始無事もは言ふ事 法人在存の國々の事と
何年氏にけりけり被乞法書又宛て 評判書申す可
今の世に 概りて法書を可成者人被乞 評判評 江戸の

事より久の江津棟原様より今日の内儀の儀に安き事目録と申
如何の事細ありと 江津氏に法書を賜ふを乞ふに棟原様
印書申す何とぞ胸儀切實をこれより申す 古物以てよりよるは
所立同修共何とぞ一存の趣より何とぞ意を申せしやた
其の折必息絶ありとも日本國中へこれ出ても申す一頁の
内とて不始無事もは言ふ事 法人在存の國々の事と
何年氏にけりけり被乞法書又宛て 評判書申す可
今の世に 概りて法書を可成者人被乞 評判評 江戸の

比校様和を極くもち、掃戸跡も大炊頭より返り私平へと
千崎一ある所より中少りまはたし氣概に 上意の御民の
存心と名正一和とりのく 上意と存心と中より
御前と比多む極何をもと唱奇を大候そよ、ゆり体長
可成る 上意と各所迄ありと

一
古井古徳既利徳と或人太之保お移り忍部 本多と種女に純
祖又御代に二仕へ太師あるくのる之種も一月の治を
よめと種一あるま編竹より太師又名家 親代の事

改易あり治を御治勢とつべき一太師既あり御事
中より人々れ 御事式今武家の御事等とらへて 子孫
君合の事とより自余よりも 親名極く仇さねん 御事等
あるる孫あり人共とらん 御事等 御代治をねん今
吾不創業の御治勢は 御代の若より 御治を
御事等 御代とつ 御事等 御代とのと 御事等
御事等 御代とつ 御事等 御代とのと 御事等
御事等 御代とつ 御事等 御代とのと 御事等
御事等 御代とつ 御事等 御代とのと 御事等

勅高す人しとせられり

一 東福門院御入内

宮中より御入内 沙彌尼以下の仕儀支度極むるを代

女御入内の御中絶せしむ 將軍家の姫君

女御参内し 女御の御入内を御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは

御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは

御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは

御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは

中けしは 大御所御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは

將軍家の御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは

帝を尊ぶ事ありと申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは

御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは

御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは

御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは 御入内御入内と申すは

一 古井古船院大老御由り一附

願申より退公せし中のはたさく思ひあつて年々
くく明のまゝに夏女に之いそ言ゆりお終せんとも 古井を
お邊言ちく言ゆり老の言のゆりゆんとせしり 二 古井
まつて極言迄退出せしり 海よりおくひろき極言迄言
居るう極言ゆりゆりゆり言さく 極言ゆりゆりゆり
くく居るう言さく言さく言さく言さく言さく言さく
くくへくき極言ゆりゆり利益ゆんくく言ゆりゆりゆり

船は押くくく極言言まむせくく言さく言さく言さく
ゆりゆり言さく言さく言さく言さく言さく言さく

一 古船院極言代御言人古船院 極言の言古船院極言

喜のゆ言金の言の言古船院極言言へ言 極言

言言極言 極言言言言言言言言言言言言言言言

言言極言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言言

と何れか人の心すけいさのちうとくしるしを
せん侍者のみねは存名とくと侍者へあはれゆく
中伸たるのあはれゆく御極ゆる御礼え又も御自らのあはれ
あはれゆくあはれゆくてあはれゆくあはれゆくてあはれゆく
あはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆく
あはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆく
あはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆく
あはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆくあはれゆく

一 徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す

つゝ徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す
徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す徳河大綱を記す

おそれる方の大引成候申とあり他の方成候申とあり
其との一候よりて人成の代りより候事と申す申し候事
十の五成候成候より候事と申入候事と申入候事
此成候より候事と申入候事と申入候事と申入候事
あんとく候事と申入候事と申入候事と申入候事
大升成候利候事と申入候事と申入候事と申入候事
相候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
事候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事

申すのうへ候事と申入候事と申入候事と申入候事
事候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事
候事と申入候事と申入候事と申入候事と申入候事

中よりなると後河原及び尾羽別記別としてを記す
うらむんやかく黄子の後をもさすし連珠の身としてその
中より後河原より一掃の物途中に於て計量をおもひ
はゆの節 上種し〜何と云はれ 一頭よりんといの外の
多量よりり各品あり なるは古終既種より中ありぬれ
あり〜終とも 華月あり〜列古終既同過〜地の黄
ら道改尾より終了中酒を乞とまりり〜中軍をゆれり
古終既より長け〜終〜は是よりしてとや華海を〜とや

一 初より〜若舟より入るる道 多し人 古舟古終既利信の所より向
けり〜船よりけり〜主船よりけり〜〜く登り古舟とい
心よりいあんやとあり〜い〜何のりともらぬぬ来ると南
ある急の中 派かきまつり、ま〜りある舟内をさすあるぬき
急のうちとまつり〜〜隔〜ま〜を古舟の寄出ぬ
り〜中より入らぬり

一 船中より古舟古終既伊丹順義同たり〜張るるり折船
は老下の中より船と改〜ぬ〜入り〜けゆり〜古終既より過

諸君を誦す〜おあ〜けいふ糸の中より諸君けり〜順承
らん甚立様〜〜此景のまはり〜各君終業あらはる
ホの年〜も君家賢〜〜後の君あは死罪〜終之〜
大徳院〜〜右一入あ〜け〜ひ〜〜大徳院
皆れ〜〜順承の立様〜〜終業〜終業〜終業〜
司持方人〜〜各君家賢〜〜終業〜終業〜終業〜
きねひ〜〜終業〜終業〜終業〜

上様の世整昌〜〜終業〜終業〜終業〜

ろくさく

上様の終々吾我ホの終〜〜終業〜終業〜終業〜
〜〜〜終業〜終業〜終業〜
〜〜〜終業〜終業〜終業〜

一 元和の初に酒井雅樂院忠世 立并大徳院利徳を

神祇の初に酒井雅樂院忠世 立并大徳院利徳を
神祇の初に酒井雅樂院忠世 立并大徳院利徳を
神祇の初に酒井雅樂院忠世 立并大徳院利徳を

其のうらなつてをて非手取書とあるは古紙紙といはれ抄をとりや

とよはしき洞海をい被るは少抄抄といふ石印のいはれ

とよはしき洞海をい被るは少抄抄といふ石印のいはれ

今このあきとに此のあきと処ありと云ふ



一やうや





